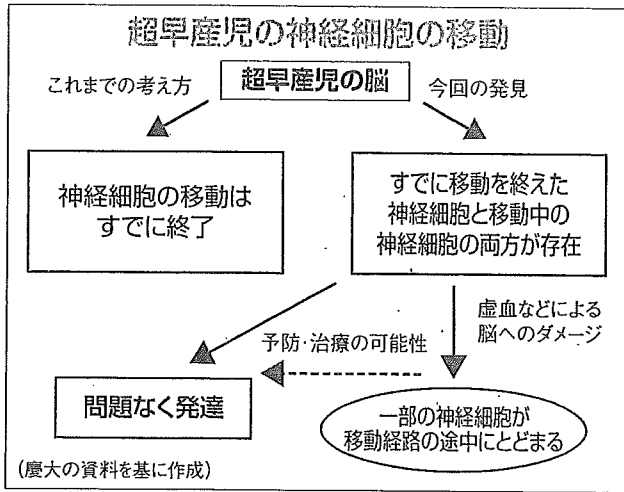


信濃町より

2017. 5/17 記者会見・プレスリリース



超早産児の認知機能障害と関連

慶大

慶応義塾大学医学部の久保健一郎専任講師らは、妊娠28週未満で生まれる超早産児に起きやすい認知機能障害が、脳の神経細胞の移動障害と関連して起きることを突き止めた。ヒト胎児の脳の解析によって明らかにした。脳細胞の移動障害を予防することにより、治療法の開発につながる。

国立精神・神経医療研究センターとの共同研究。研究成果は18日、米国医学雑誌JCIインサイトに掲載された。超早産児は、医療の発達により生存率が上がっているが、2割から半数が認知機能障害を伴うとされている。研究チームが妊娠週数を解析したところ、超早産児が生まれる25週前後でも、脳の神経細胞が脳内で移動し続けていることが明らかになった。

超早産児は体の機能が未発達なため、脳の血が不足する「脳虚血」を合併しやすい。超早産児では、神経細胞が移動経路の途中に留ま

移動経路の途中に留ま

神経細胞の移動障害は、低体温療法によって予防できることがマウスの実験で分かった。

超早産児に低体温治療をするにはリスクが高く、そのまま応用はできない。

血による神経の移動障害を予防するメカニズムを解明することで、新たな治療法の開発につながる。